僕は友達が少ないif

赤司楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕は友達が少ないｉｆ

【Ｎコード】
Ｎ６３９７Ｙ

【作者名】
赤司楓

【あらすじ】
銀色の髪に碧緑の眼が特徴的な高校生ーーー黒崎（くろさき）一護（いちご）。
金髪碧眼が特徴的な高校生ーーー柏崎（かしわざき）星奈（せな）。
お互いの両親の勝手な理由で『許嫁』にされた二人。
しかし、この『婚約』に反対したのは黒崎一護だけだった。
柏崎星奈の方は本気で一護と結婚する気でいる。
果たして、一護は星奈との『婚約』を破棄する事が出来るかーーー。

『僕は友達が少ない』の二次創作です。

頑張って完結させる気でいますので応援宜しくお願いします。

感想募集中です。

プロローグ：忍冬《スイカズラ》（前書き）

宜しくお願いします。

プロローグ：忍冬《スイカズラ》

銀色の髪を差してか、碧緑の眼を差してか、それとも冷めた性分を差してか、みんな俺を『氷のようだ』と言っていた。

それが原因かどうかは分からないが、俺には友達と呼べるような存在は数人しか居なかった。唯、俺は逆に友達が少ない方が居心地は良かった。別に格好つけてる訳では無い。俺は、人と話すのが少し苦手だ。『対人恐怖症』とまではいかないが、それでも普通の人と比べると、話すのが少し苦手だったと思う。

だから、“あいつ”が俺の『幼馴染み』だという事が、俺は苦痛で仕方がなかった。

だってそうだろ？　“あいつ”はこの学園の理事長の一人娘で、金持ちで、成績優秀で、運動神経抜群で、何でもすぐにこなせる天才肌で、容姿端麗で、巨乳だ。それで、性格が極度のナルシストで高飛車な女王様。

そして、一番最悪なのが俺と“あいつ”が『幼馴染み』で『許嫁』だという事だ。

勿論、俺はその事を『認めていない』。だから、“あいつ”も『認めない』と言ってくれたら楽だったのだが、楽だったのだが、……“あいつ”は満更でも無い様子で、俺達の親兄弟の前で満面の笑みを浮かべながら、こう言い放ちやがった。

『まかせといて！！』と……。

最悪だった。何が『まかせといて！！』だ。“あいつ”は一体何を考えてこんな言葉を言い放ったんだ……。
俺はあの時“あいつ”が口にした言葉を脳内で再生する。

ーーー『まかせといて！！』

この一言で、たった一言で、僅か七文字で、俺の生活は激変した。
俺が“あいつ”と『許嫁』になったという事は、三日も経たずに瞬く間に学園中に広まっていった。本当に最悪だった。“あいつ”の周りにいる変人（変態？）には嫌な眼で見られるわ、“あいつ”のファンクラブの会員共には訳の分からん抗議をされるは、クラスにいるモブキャラ共は、普段話し掛けてこないくせに、こういう時は面白半分で話し掛けて来やがった。
本当に迷惑な事だ。
俺は唯、平凡に生きたかった。
別に友達が少なくても『二人の親友』さえ居ればそれで良かった。
お互いの両親の下らない『理由』で勝手に『許嫁』にされ、その『許嫁』の方は、本当にそれを真に受けて俺と本気で結婚する気でいやがる。
あぁ、頭痛がする。
せめて高校では普通に生活したい。
恐らく、俺は“あいつ”ーーー“柏崎星奈（かしわざきせな）”と『許嫁』になった日の事を一生忘れないだろう。

『ねぇ、一護、忍冬（スイカズラ）の花言葉って知ってる？』

プロローグ：忍冬《スイカズラ》（後書き）

感想待ってます。

第一章：隣人部発端篇：？：寝坊……？

眼を覚ますと、何故か金髪碧眼の美少女ーーー柏崎星奈が俺に膝枕をしていた。……おかしい。昨日は確かこいつは俺の部屋に居なかった筈だ。なのに何で朝になったらこいつが居て、しかも俺に膝枕をしている？　いや、それよりこいつはどうやって俺の部屋に入ってきた？　部屋の鍵は勿論、家の鍵も閉めといた筈だ。……こいつ、まさか鍵を壊して入ってきたのか？

俺は恐る恐る口を開く。

「……おい、何してやがる」

「あ、起きたの一護。おはよう、朝ごはん出来てるって“お母さん”が言ってたわよ」

こいつ、この情況で普通に『朝ごはん出来てる』とか言ってきやがった。ある意味恐ろしい奴だなお前は……。

俺は部屋の扉を確認する。鍵は……壊れていない。……こいつ本当にどうやって俺の部屋に入ってきたんだ。

頭の中で色々思案する。

そこで俺は一つの可能性を思い付いた。

……まさか、母さんがこいつを家に入れたのか？さっきこいつ『朝ごはん出来てるって“お母さん”が言ってたわよ』とか言ってたな。それってこいつは朝俺の母さんと話したって事でいいんだな。

という事は、

「お前どうやって俺の部屋に入ってきた」

「え？一護のお母さんが鍵を貸してくれてそれで……」

「勝手に人の部屋の鍵を開けた、と」
「う、うん」
やっぱりそうかよ。
星奈が申し訳なさそうに言う。こいつでも一応は罪悪感があるみたいだ。　罪悪感あるんだったらやらなきゃいいのに……。
「星奈」
「なに？一護」
「邪魔」
「っ！？」
俺の言葉に、星奈は硬直した。思ってる事言っただけなんだけどな。
星奈が硬直しているのを無視して俺は自分の意思で膝枕から解放される。
俺は後ろに星奈が居るのにお構い無く上半身裸になる。見事な胸板と腹筋……とまでいかないが、中途半端に鍛えられた胸板と胸板が顔を出す。
まぁ、腹出てるよりは中途半端に鍛えられた胸板と腹筋の方がまだましだな。だからといって筋肉隆々も嫌だが……。
制服に着替え終わった俺は小さい鏡を机から取る。いつもと変わらない銀髪のツンツン頭、少しつり目で氷のような碧緑の瞳。はぁ……、普通の容姿に生まれたかった……。
俺は後ろでずっと硬直している星奈に眼を向ける。
こいついつまで硬直してる気だ。
「おい、星奈朝飯食いに行くぞ」
「……、」
反応無し。
面倒臭いなこいつ。
ドンッ！！

「いたぁ！？」
容赦無い拳骨を星奈の頭に食らわす。
それを受けた星奈は少し涙眼になりながら、
「何すんのよ！　許嫁の頭殴るってひどくない！？」
「うるさい、俺はお前を許嫁と認めた覚えは無い」
「何でよ！！」
「うるさい」

ドンッ！！

もう一度拳骨を食らわす。
「また殴った！！」
「今日もいい天気だな」
「さらっと流さないでよ！」
部屋の窓を開け、空を眺める。うん、良い天気だ。外の新鮮な空気を吸う。今日も空気が美味しい。味無いけど……。
「朝飯食いに行くぞ」
「だから無視しないでよ！！」

＊＊＊

星奈を引き連れて、俺はリビングに入った。鞄をソファーの上に

置く。ついでに星奈も。視線を家族に向ける。俺達を待たずに朝飯を食っている。せめて俺達が来るまで待っとけよ……。
「あら、一護おはよう」
俺に気づいた母さんが挨拶してきた。
「母さん、」
「なに？」
「俺の部屋の鍵星奈に渡しただろ？」
俺の言葉に母さんは黙り混む。
「一兄（いちにい）」
「あ？」
妹の夏梨（かりん）が俺に話し掛けてくる。無視する訳にもいかないから夏梨の方に視線を向ける。夏梨は味噌汁を飲みながら、
「早くごはん食べないとちこくする」
「……、」
夏梨は箸を時計に向ける。俺もそれを追って時計を見る。
八時五三分。
「はぁ！？　八時五三分！？　やべ！　おい、星奈朝飯食ってる時間は無ぇ！！　今すぐ学校に行くぞ！！」
「え？　待ってまだ味噌汁飲んでーーーてちょぉ！？」
味噌汁を飲もうとしている星奈の手を無理矢理引っ張り、ソファーに置いてある鞄を二つ取り、玄関に向かう。未だ靴が捌けていない星奈を問答無用で引っ張り、俺達は外に出る。
「ちょっと一護！　まだ靴捌けてないって！！」
「それ所じゃねぇ　！マジで遅刻するっつってんだろ！！」

＊＊＊

「タンジュンだねぇ、一兄は、」
「助かったわ」
「いいよ」
「なんだかんだ言っても、いちおう星奈ちゃんの事大切にしてるのよね」
「そうだね……」

第一章：隣人部発端篇：？：いつから……？≪※星奈視点≫

一護に手を引っ張られながら、あたし達は自分達が在籍している学園ーーー聖クロニカ学園に向かっていた。

朝ごはん食べそびれちゃったけど、それを帳消しにできるほどの良いことが今起きている。

何年ぶりだろ？　一護に手を引っ張られながら学校に行くのって。多分、小学生低学年以来かな。

一護の銀色でツンツンした髪が激しく揺れているのが、視界にはいる。ついでにあたしの金色の髪も。

はっきり言って、かなり速いスピードであたし達は走っている。学校に着いた時髪すごい事になってるかも……。

正直言ってかなり疲れる。

「一護！　速いって！！」

そうあたしが言うが、

「あ？　結構スピード落としてるぞ？」

……いやいや、だいぶ速いから……。正直言って運動にかなり自信あるあたしでも一護に手を引っ張られてないとついていけないと思う。……そういえば、あたし一護に運動で勝ったことないな。勉強普通なくせに何で運動神経だけ良いのよ……。

「くそ、何で信号赤に変わんだよ……」

「やっと休憩出来る……」

「お前体力無さすぎ」

「一護が多すぎんのよ」

ジト目であたしが言う。
しかし一護は、
「いやいや、そんな事無ぇよ」
そんな事あるわよ。何で汗一つかいてないのよ。マラソン選手並みね。一護の体力の多さは。
……それにしても、制服着てる学生がやけに多いわね。ほんとに遅刻してるのかしら。
そんな事を考えていると、いつまにか信号は青に変わっていた。
それを見た一護がクルリと首だけを動かして、あたしを見た。
「走るぞ」
「うん」
あたしは素直にうなずく。
再び、あたし達は走り出す。
……ねぇ、一護？あんたは覚えてるか分かんないけど、小さい時はよくこうやって学校に行ってたよね？あたしは今でも鮮明に覚えてる。目をつぶれば瞼の裏に映像が流れる。……これ、さっきも似たような事言ったわよね？　まぁいいか。
顔が熱いのが手に取るように分かる。
多分、顔がリンゴみたいに赤くなってるんだろう。
いつから好きになったんだろう……？
毎日見て、毎日遊んで、毎日聞いて、毎日……。いつから、意識し始めたんだろう。あの時からかな……。一護がーーー。……あれ、急にスピードが……。
「おい、大丈夫か」
「え？　何が？」
「『何が』じゃねぇよ。疲れてんだろお前」
「……疲れてないけど」
「嘘付け、何年お前と一緒に居ると思ってんだよ。お前の事なら知りつくしてる。歩いて学校に行くぞ」
そう言って、一護はあたしから手を話す。

「ちょっと待ってよ、遅刻しそうなんでしょ？」
「ん」
一護が携帯電話を見せてきた。
八時〇二分。
……なるほど、どおりで学生が多いわけね。
「……騙されたのね」
「あぁ、騙された」
「……」
「……」
無言になるあたし達。夏梨ちゃん、そんな悪い子に育ってたのね……。

第一章：隣人部発端篇：？：隣人部……？

夏梨に見事に騙された俺達は、八時一五分と、かなり早くに登校してしまった。

まぁ、それから色々あって、午前の授業を全て終えた俺は、一人優雅に昼飯を食べていた。

今日の昼飯はコンビニで買ったカツサンド、カップラーメン、缶コーヒー、ついでに食後のスイーツのプリン。うん、相変わらずよく食うね俺は。

そう思いながら、俺はカツサンドを頬張る。……うん、美味い。やっぱ“肉”は良いな。“肉”は。

それから、五分程でカツサンドを平らげた俺は、ラーメンに取り掛かった。……良い香りだ。……インスタントだけどな……。

俺は麺を箸で掴み、口に入れる。

その瞬間、

ドドドドドッ！

ダッ！！

ガラッ！！

「一護！！」

柏崎星奈が思い切り廊下を走り、ドアを抉じ開けた。……おいおい、理事長の娘が校則破ったよ。いいのかよこれ。いいんだったらせこくね……？

「……何の用だ。俺は今忙しい。早々にこの部屋から出ていけ」
「これ！！」
おいおい、すげぇな。堂々の無視だよ。
俺はラーメンを口一杯に入れて、
「ほわえふえぇわぁ。わぁふぇへえ（お前すげぇな。じゃぁ出てけ）
」
「なんて言ってんのよ！」
星奈が華麗に突っ込む。うん。突っ込みの才能あるんじゃないか
……？
星奈が机に一枚のプリントを置く。
「何だこれ」
「隣人部よ！！　これこそあたしが求めていたものよ！！」
そう言いながら、星奈はプリントをバンバン叩く。
仕方ないから、俺はプリントを取る。
……。
そして絶句した。
何だこれ。つかおにぎりか……？　手足あるぞ。何処だよここ。
山の上か……？
まぁいいや。
俺はそこに書かれている文章を読む。

『隣人部

とにかく臨機応変に隣人
とも善き関係を築くべく
からだと心を健全に鍛え
たびだちのその日まで、
共に思い募らせ励まし合い
皆の信望を集める人間になろう！』

何だよこの訳の分からん部活は。星奈の奴ここに入る気じゃ無ぇだろうな。
「……あ？　んだよこれ『ともだち募集』……？」
「一護も気づいたのね！」
「あぁ」
……地味なネタ仕込みやがって。
「で、何が求めていたもの何だ？」
「ともだち募集って書いてあるのよ！？　この部活に入ればともだちができるわ！！」
出来るのかよ。
「好きにしろよ」
ラーメンを食べ終えた俺は、デザートのプリンを手に取る。
「一護も入るのよ」
その言葉を訊き、俺は硬直する。
「……何言ってんだお前」
「言葉通りの意味よ。これ」
そう言って、星奈は入部届けを俺に渡す。
「まじで……？」
「まじ！！」
満面の笑みを浮かべ、星奈が答える。
「まぁ別にいいか」
……高校二年になって初めて部活というものに入る事になった……のか？

第一章：隣人部発端篇：？：入部……？（前書き）

スマートフォンに変えたら、文の最初にマス開けれなくなった。

第一章：隣人部発端篇：？：入部……？

全ての授業が終わり、放課後になった。星奈に連れられるがままに、俺達は隣人部の部室である『談話室４』に向かっていた。
今の俺は非常に鬱である。
星奈による拉致。
訳の分からん部活に強制入部。
周りからの嫌な視線。
……不幸だ。
まぁ、俺の事はどうでもいいか。
星奈はというと、
「……♪」
ご機嫌だった。これでもか、って程にな。
俺は星奈に渡された新入勧誘プリントを再び見る。……やっぱりひどい。いや、ひどいを通り越して哀れみすら覚える。
この『隣人部』というのは、本当は友達作りが目的の部活。部の紹介文には『臨機応変にやら、皆の信望』とか書いているが、実際この部に入る奴は皆友達が居ない悲しい奴という事になる。
そのレッテルを貼られるのは、少し、いや、大分嫌だ。
「ここね」
「……着いたのか」
……入りたくない、が、星奈は俺の気持ちなど知る余地も無く、ドアをノックした。

ーーーコンコン

ここの部員もまさか柏崎星奈が入部してくるとは思ってもいなかっただろうな。

ゆっくりと。

談話室の扉が開く。黒髪の女生徒が顔を出す。

そして、

「隣人部っていうのはここね？入部したいんだけど」

と、星奈が言った。

しかし、

「違う」

ばたん！

ガチャ！！

そう言って、黒髪がドアを閉めた。

「……違うらしいぞ？」

「ちょ、どういう事よ！！」

ドンドンドン！！

そう叫んで、星奈は再び少し強めにノック（？）する。

あ、ドア開いた。

「ちょっと何で閉めるのよ！あたし達は入部ーーー」

「リア充は死ーーー待て、あたし達？二人いるのか？」

「そうよ！いるわよ！！」

少しドアは開いた。

黒髪の女生徒がおれの顔を見る。

結構可愛かった。

「……」

「ちょっと何考えてるのよ！」
「よし、お前の入部テストをする。あの新人勧誘プリントを見て、何か分かった事はあるか？」
「無視しないでよ！！」
「……友達募集」
「良いだろう、合格だ。部室に入れ」
黒髪に言われるがままに、俺は部室に入れられる。
そして、

ばたん！
ガチャ！！

黒髪は再び鍵を閉める。
「さて、部活を始めるか」
星奈の事は完全無視。ある意味こいつもすげぇな。
星奈の奴大丈夫か……？
「おいおい、いいのかよあの子は」
あ、こいつが最近噂の転校生か。……うん、噂通りの中途半端な金髪。
黄土色ヤンキーの言葉に黒髪は、
「何を言っているんだ、この黄土色ヤンキーは。あんな『リア充』をこの部に入れてどうする？」
しかし、黒髪は本当に星奈の事はどうでもいいようだ。
「いやリア充って……。つかあの子は誰だ？知り合いか？」
「……柏崎星奈。この学園の理事長の一人娘だ」
こいつ星奈が嫌いな女子の一人だな。
「へぇ。あれがそうなのか」
この黄土色ヤンキーは今日初めて星奈を見たみたいだ。
「お前、名前は？」
いつの間にか、黒髪の話し相手は俺に変わっていた。

「……黒崎一護」
俺が名前を名乗り終わると、急に窓から音が聞こえた。
ドンドンドン！！
それを見た黒髪が心底嫌そうな顔をしながら、
「……しつこい奴だ」
今度は窓ガラスにへばりついている星奈。確かにちょっと怖い。
黒髪は若干引きながら窓ガラスを開く。
「なんでそんな意地悪するのよ！このあたしが入部してあげるって言ってるのに！」
「冷やかしならお断りだ」
「冷やかしじゃないわよ！友達募集ってポスター見て来たんだから！」
「嘘つけ。さっきの答えを聞いて分かったんだろ」
「嘘じゃないわよ！」
「おい、黒髪」
俺がそう呼ぶと、黒髪はキッ、とおれを睨む。
「私は黒髪じゃない。三日月夜空だ」
「じゃぁ三日月。そいつが言ってる事は本当だ。俺より先に気付いていたしな」
「……、」
「話だけでも訊いてやってくれ」
「く、しかたない。話だけだぞ」

第一章：隣人部発端篇：？：入部……？：２：

「あたしってほら、完璧じゃない」
ブチッ、という音が、俺の隣ーーー三日月夜空から聞こえた。恐らく、先程の星奈の発言でキレかけているのだろう。
頼むからこれ以上三日月を怒らせないでくれよ。
しかし星奈は、
「頭脳明晰スポーツ万能、そして見ての通り美少女。神がオーダーメイドして造ったとしか思えない完璧な造形美じゃない？」
……。
言葉を失う。
「……、」
こいつ、更に怒らせる気か。
俺は星奈に近づき、
「星奈、それ以上三日月をおこらせない方がいい」
「……、」
ジト眼で俺を見る星奈。
「ふん、下品な乳牛のくせに」
おい、三日月、さっき俺が止めたのを見ていたかったのか？
それを訊いた星奈が、
「あら、貧乳が何か言ってらっしゃるわね」
星奈、お前も応戦しなくていい。
三日月からゴゴゴ……、という音が聞こえる。瞳には殺意が宿っている。

「……私は別に小さくない」
「中途半端な大きさの胸なんて“無い”のと同じじゃない？」
「無いを強調させるな……！！」
「なに？やる気！？」
「殺ってやろうじゃないか。肉！！」
いきなり眼の前で取っ組み合いが始まる。
俺と黄土色ヤンキーはため息。
俺は立ち上がって、
「止めとけ。星奈」
星奈の手を掴む。
「お前も座れ」
俺は三日月に言う。
それから、
「おい、黄土色ヤンキー」
「え？俺の事？」
「お前以外に髪の色が黄土色の奴がいるか？お前も止めろ」
「俺はヤンキーじゃねぇ」
「そうかよ」
と、俺と……、誰だっけ？
「お前名前何？」
「羽瀬川小鷹（はせがわこだか）」
「そうか。俺はさっき言ったと思うが、黒崎一護。まぁ半ば強調的に入部させられたが、“取り合えず”宜しくな」
俺達が自己紹介している間に、星奈と三日月は、

「……てめぇ……パパに頼んで退学にするわよ」
「パパァ？いい年してパパだのママだの言ってて恥ずかしくないのか？いつまでも乳離れできない甘えんぼうちゃんには困ったものだな。生きていて恥ずかしくないのか？」

おいおい、だから何でお前等は喧嘩してんだよ。そして星奈、お前は何で涙眼になっている。
「と、ところで！」
本当に殴り合いになる前に羽瀬川が強引に話に割り込んできた。
「「あぁ？」」
ヒロインが言ってはいけない言葉の一つをあっさりと言いやがった。
「か、柏崎は本当に入部するのか？」
「入るわよ。入部届け持ってきたし」
「ちっ」
三日月が露骨に舌打ちをする。
「……なんか文句あるわけ？」
「ある。出てけ。あ、違った、死ね」
「あたしさぁがあっ！？」

ゴッ！！

これ以上面倒臭い事は嫌だから星奈を気絶させる。
崩れる星奈をおんぶする。
それを見た二人は、
「……、」
「……、」
いきなりの出来事に二人は呆然としていた。
「悪いな。こいつ一回言った事は何があっても絶対撤回しないんだ。取り合えず、今日はもう帰るから、明日またこいつと話してやってくれ」
「断る」
「早ぇよ。じゃぁ帰るわ」
「明日も来い。ただし、そこの乳女は連れてくるな」
「それは約束出来ないな。来るか来ないかはこいつが決める事だ」
俺はそれだけ言って、部室を出た。

さて、これからどうなるか……

第一章：隣人部発端篇：？：残された者達≪※小鷹視点≫

黒崎達が出ていったため、部室は静寂が支配していた。
俺としては、男子の部員が入ってくれることはすごい嬉しい。だけど夜空は、
「……私は絶対にあいつは入れないぞ……！！」
柏崎に敵意丸出しだった。女子の部員が入ってくれるのに嬉しくないらしい。
何があったんだよお前らに……。
「お前は何でそんなに柏崎の事嫌ってるんだよ」
「さっきも言っただろう。あいつはこの学園の理事長の一人娘だ。いつも男子にちやほやされているお嬢様気取りの好かないやつだ」
「お嬢様、ねぇ」
柏崎星奈に黒崎一護。髄分と個性豊かな面子が入ってきたもんだ。特に黒崎一護の方。
銀髪に碧緑の瞳。日本人の外見じゃねえぞ、あれ……。
「……あれ？何で黒崎と柏崎は一緒に来たんだ？」
「さぁな。誘われたんじゃないのか」
「誘われたって……。でもあいつ普通に柏崎の事殴ってたしな。柏崎の取り巻きじゃあないだろ」
「……、そうだな。多分あれが肉の婚約者だろう」
「そうか……。あれがこんやーーー」
……待て。今夜空の奴何て言った？
「すまん。もう一回言ってくれ」
「『……、そうだな。多分あれが肉の婚約者だろう』って言ったん

だ」
「はぁ！？婚約者！？あいつ俺らと同い年だろ！？」
「何だお前一ヶ月もこの学校にいて知らなかったのか？」
「いや、そんな事言われてもな……」
同い年で、少し変わった容姿で、婚約者……はいないけど、何か似たような似ていないような境遇だな。
「ん？……ちょっと待て。じゃあ何で夜空は黒崎をこの部に入れたんだ？あいつだって一種のリア充だろ？」
「あいつは嫌々『婚約者』になったらしい。嫌々ではリア充にならん。それに、あいつが友達と一緒にいる所を私は見たことない」
「じゃあ、あいつも……」
「同類だ。少し『特殊』だがな」
「……特殊？」
「すぐに分かるさ」
それだけ言って、夜空は部室をあとにした。
……特殊……？何が特殊何だ？……分かんねぇ。
髪の色とか目の色のことか？確かにあいつの外見はちょっと特殊だが……。
……一体何が特殊何だ……？

ーーー

「黒崎が特殊なのは、まぁ嘘だけどな」

行間：一

遥か遠い記憶。
俺達は出会ったーーー。

ーーー

「悔しい？」
「……別に……」
「格好つけちゃってー」
「別に格好つけてない」
「……、」
「何だよ」
「じゃあさ、八極拳やってみない？」
「はぁ？何いきなり？頭大丈夫？出来るわけないじゃん」
「何故『やろう』って誘っただけなのにそこまで言われなきゃいけ

ないのよ」
「だっていきなり変な事訊いてくんだもん。それに強くなれるわけないじゃん」
「ほらまたそうやって決めつける。強くなったら星奈ちゃんを守れるよー」
「何でそこで星奈が出てくるんだよ……」
「まぁ、素人相手に技使ったらあたしは問答無用であんたを破門するけどね」
「じゃぁ習ってる意味ないじゃん」
「はい本音出たね」
「……？」
「素人相手に技使ったら破門。じゃぁ意味はないって事は、一護は星奈を護る為に使う気なんでしょ」
「……、」
「護るんじゃなかっの？だから星奈ちゃんを逃がしたんでしょ？」
「俺は別に……」
「頑固な子ねー。この高坂愛理（こうさか えり）が鍛えれば常人よりは二センチぐらい強くなれるわよ？」
「たった二センチかよ。じゃぁーーー」

第二章：狩人篇：？：“オマエ”を狩る

あれから色々あって、何とか星奈が隣人部に入る事が出来た。
その時の事がどういうモノだったかは、今思い出しても吐き気がする。
まぁ、あいつ等の名誉の為にどういう事があったのかはあえて言わない。
教室で誰もが帰宅の準備をしている中、俺はボーっと外を眺めていた。雲がゆっくりと流れていく。……何か癒される。
だが、それも束の間。
勢い良く教室のドアが開かれる。そこに居たのは、柏崎星奈。だからお前には校則というものは無いのか？
「一護、部室いこ！」
満面の笑顔を俺に向けながら星奈が言ってきた。
俺はゆっくりと座席から立ち上がる。
「……、」
「ほら！早ぐぅっ！？」

ドンッ！！

取り合えず一発。
「だから何で婚約者の頭を殴るのよ！！」
「人の名前大声で言うな。恥ずかしい」
「……一護に恥ずかしいなんてあるの？」

「あるわ」
俺だって羞恥心ぐらいある。
いきなり大声で名前言われたら恥ずかしいに決まっている。
「部室行かないの？」
「帰るって言っといて」
「ほらほら行くわよ！！」
……相変わらず人の話訊かない奴だな。
まぁ、いいか……。

ーーー

ガチャン
バダッ

「遅いぞ。黒崎」
部室に入った瞬間いきなり言われた。
「悪い。本当は帰るつもりだったんだが、星奈に無理矢理連れてこられた」
「それは私に喧嘩を売っていると思っていいんだな……？」
「さぁな」
適当に三日月の相手をして、俺は適当に鞄をソファーの上に投げ捨て、椅子に座る。

早く終わらないかな……。
そして、俺の思っていた事が起こる。
それは、

「おい乳女。お前は何故この部室に来ている。部外者は早く帰れ」
「あたしは部員よ。あんたが出ていけば？」
「何の事だ？お前は入部届けを顧問に渡してないだろう」
「あんたに渡したでしょう！！」
「……？」
「……、」
「……あぁあれか。すまんな。間違ってシュレッダーにかけてしまった」
おいおい酷いな。
「何してくれてんのよ！！」
星奈がキレる。そりゃ怒るだろうな。
「ーーーという事で部外者の牛はさっさと出ていけ」
あ、乳女から牛に変わった。
「……っ！！」
「どうした？『出ていけ』と言っているんだ。お前は動く事まで牛並なのか？」
「ーーー、」
「んー？聞こえんなぁ？」
あ、泣くな星奈の奴。

「もういいわよ！！キツネ女のアホボケバカカス死ねぇぇぇぇええええ！！うわぁぁぁぁぁああああああああん！！」

ガチャッ！！
バダッ！！
ドドドドッ！！

「やり過ぎだぞ夜空」
「ふん！」
「おいおい後であれ泣き止ますの俺だそ」
「がんばれ」
頑張れじゃ無ぇよ。
「でもシュレッダーにかけるのはやり過ぎだぞ」
「何を言っているんだお前は。あんなの嘘に決まってるだろう」
「……、」
「……、」

ーーー

隣人部活動報告その一。
星奈が三日月に虐められて逃走。

第二章：狩人篇：？：“オマエ”を狩る（後書き）

星奈さんは夜空に狩られました。

第二章：狩人篇：？：“オマエ”を狩る：２：

何とか星奈を泣き止ますのに成功した次の日の事だ。
今日は自分の意思で隣人部に行った。星奈は入部届けを顧問に渡しに行ったいるので、少し遅れるらしい。珍しい……のかどうか分からないが、一番最初に部室に来てしまった。
鞄をソファーに投げ捨て、椅子に座る。
まぁ、一人だからかやる事が無い。
……ここ最近は星奈以外一緒に居た記憶は無いな。三日月達はまだ知り合ったばかりだから友達では無いと思う。元々星奈に無理矢理いれられた部活だしな。
「……暇だな」
思わずそう呟いてしまった。
誰か来ねぇかな。
と、そう思っていた時だった。

コンコン

「あ？誰だ……」
客……？こんな訳分かんねぇ部活に……？

ガチャッ

「……、何か用か？」

「小鷹せんぱいはいらっしゃいますでしょうか？」
小鷹？……あぁ羽瀬川の事か。
つかこいつ……男……か？確かに男子の制服着てるけど、男に見えねぇ。
「羽瀬川ならまだ来てないぜ」
「……さようですか」
おいおいそんなしゅんとすんなよ。こっちが悪いみたいじゃないか。
「じゃぁ中で待っとくか？」
「！……いえ、また日をあらためてこさせていただきます。ではしつれいしました」
「……あぁ」

バタン

……何だったんだ今の？

ーーー

「では隣人部の活動をする」
全員揃った所で、三日月がそう言った。
「そういやさっき羽瀬川に客来てたぜ」
「客？誰？俺に？」

友達が居ないから凄い食い付いてきた。まぁしょうがねぇだろうな。
「何か女みたいな男子」
「……はぁ？女みたいな男子？」
「そ」
事実たぜ、これは。
「貴様ら私の話を聞け」
三日月が額に青筋を浮かべながら言ってきた。短気すぎだろ。もっとカルシウム取れ。
「後で教えてやる。今は三日月の話を訊いた方が良さそうだ」
「あ、あぁ。でもその前に一ついいか？」
「何だ」
「あれ何？」
羽瀬川が指差した所を見る。星奈が泣いていた。いやだから何で泣いたんだよ。
「私が泣かした」
またお前か三日月。
「大丈夫かあれ」
羽瀬川が心配そうに言う。もう慣れたな。
「後で俺が泣き止ますから問題無ぇ」
「……そうか」
結局今日って何すんだろうな。
「さて、今日の活動はみんなでゲームをしてみようと思う」
『ゲーム？』
俺と羽瀬川の声がハモる。
「みんなでゲームねぇ。何のゲームすんの？」
「ふん。これだ」
俺の問いに三日月は一本のゲームを鞄から取り出す。
作品名は『モンスター狩人』。ーーー通称『モン狩』。
あぁ、成る程。そういう事か。
大方どこかでやっている所を見たんだろう。

恐らく、
「『モン狩』を皆でやるって事か」
「そうだ。お前は物分かりがいいな」
「そりゃどうも」
そう言って俺は、コーヒーを一口口に含む。
「俺持って無いんだけど」
「買え」
「……、」
御愁傷様、羽瀬川。
「と、いう事だから来週まで『ＰＳＰ』と『モン狩』を持ってくる事。以上。今日はこれで解散だ」

ーーー

隣人部活動報告その二。
羽瀬川に客。星奈が再び三日月に泣かされる。ゲーム相談？

第二章：狩人篇：？：ＰＳＰ　とモン狩貸して≪※星奈視点≫

一護が言ってた。
次の部活には『ＰＳＰ　とモン狩』がいるって。
でもあたしＰＳＰ　もモン狩も持ってないのよね。
モン狩か。
そういえば、同じクラスのモブキャラが持っていたような持っていなかったような。……どっちだけ……？
確かめたにいったほうが早いわね。頼んだら貰えそうだし。
でも問題が一つあるわ。今はもう放課後。あたしのクラスにいるほとんどのモブキャラがもう帰ってるはず。
部活してるところを一個一個見て回るのもめんどくさいわね。
どうしようかしら。
……。
……ん？
……あ、いた。
ラッキー。あたしって運まで良いのね。
「ねぇ」
「え？……！！は、はい！何かしょうか！？」
うわ、相変わらず気持ち悪い反応。
さっさと終わらせよ。
「あんたさー、ＰＳＰ　とモン狩持ってる？持ってたら貸してほしいんだけど」
「は、はい！！喜んで！！なんなら差し上げます！！」
「え？いいの？」
「はい！！」
「じゃあ遠慮なく貰うわね。……ご褒美に踏んであげるわ！！」

ドンッ！！

「ああ！！持っと！持っとぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

「ふん！女神のあたしに踏んでもらうのがそんなに嬉しいの！？この変態！！」

ドンドンドン！！

「ああ！！はい！！嬉しいです！！変態でもいいです！！」

【しばらくお待ちください】

「……何かに目覚めそうだったわ」

いいえ、そんな事よりまさかくれるとは思わなかったわね。

さて、家に帰って早速やろうっと。

……♪

第二章：狩人篇：？：モン狩持ってる？≪※小鷹視点≫

夜空にモン狩を強制的に買えと言われたその日の夜の事だ。
俺は、妹の小鳩と一緒に晩飯を食っていた。
今日の晩飯はカルボナーラにスープ。少し栄養が片寄っているが、たまになら大丈夫だろう。どうせならもっと手の込んだ料理を作りたいのが、何分時間がない。
俺がカルボナーラを一口口に含んでいると、目の前に座っている小鳩が、赤色の飲み物ーーー処女の生き血……いや、本当はただのトマトジュースである。小鳩はワイングラスに注がれたトマトジュースを一口飲む。……こっから見てると本当に血に見えるから困る。
「ククク……やはり処女の生き血は格別だ」
いや、それトマトジュースだから。……まぁいいか。
「小鳩」
「何だ我が半身よ」
「モン狩持ってる？」
「モン狩？……うん、持っとるよ」
あ、口調戻った。
「あ、じゃあ貸してくんねぇか？」
「ええよ」
よかった。買わなくてすんだ。危うく五〇〇〇円損するとこだったぜ。小鳩持っててよかった。
……、友達一〇〇人なんて出来なくてもいいから、一〇〇人分大切

に出来るような本当の友達を作りなさい、か……。
また、出来るのかな……？
……あいつは、まだ元気にしているのだろうか。

ザザーーー

ーーーだったら俺はーーのことを一〇〇人分大切にするよ。一〇〇人……いや、一〇〇万人で一〇〇億万人でも、世界中が敵になっても、俺だけはお前の友達でいる。

ザザザーーー

ーーー、ーーのことを一〇〇万人分大切にするよ。

ザザーーー

まだ、ーーが俺の事を覚えていたらーーー。
……いや、覚えてないか。
どうせ昔の事だ。
向こうだって一〇年前の事なんて、きっと覚えていないだろう。
あいつの事をこんなふうに思うようになるなんて、あの頃の俺にはきっと信じられないだろうな……。
……。
……また、会いたいな。
ーーに……。

第二章：狩人篇：？：久しぶり

「ーーーよう。まぁ、しばらくこれなくて悪かったな。……これで我慢してくれ」
そう言って、俺は家から持ってきた酒を、墓前に置く。
お前が死んでから、もう三年も経つんだな。早いもんだ……。散々お前に殴られたっつうのに、こっちはまだ全然お前を殴ってねぇよ。たくっ、せめて俺があんたに勝ってから死にやがれ。
……あんたが死んでから、いろんな事が起きたよな……？“星奈が俺の許嫁になって”、“親父が海外に転勤して”、“俺がーーー……特に無ぇ”や……。
それでも、結構楽しんで生きてるから、あんたは安心して、あの世から見ててくれよ。
後は……、
……。
……そうだ。最近な、訳分かんねぇ部活に入ったんだ。名前は『隣人部』。友達作りが目的の部活らしいんだ。
俺が昼飯食ってる時に、学校の校則を破った星奈が眼キラキラ輝かせて新人部員勧誘プリント持ってきたのが、全ての始まりだったんだ。
その部にはな、三日月夜空と羽瀬川小鷹って先輩部員がいるんだ。先輩って言っても、同い年なんだけどな。
そこで、何でか分からないが星奈と三日月は犬猿の中で、いつも喧嘩してるんだ。まだ二日しか見てないがな……。結局、いつも星奈

か泣かされて俺が泣き止ますんだ。ははっ、困ったもんだろ？あいつの泣き虫は、昔から全く治らねぇんだ。
後、あんたが死んでから、八極拳は一回も使ってないぜ。越えたい相手が居ないのに、やっててもの意味は無ぇからな。でも星奈を殴るのは変わってないぜ。一応手加減はしてるし、八極拳も使ってないから問題は無ぇだろ？。
……なぁ、あんたは何で俺に八極拳を教えたんだ？
あんたは『二〇歳になって、酒が飲めるようになったら教えてやる』って言ってたけど、結局あんたは俺に理由教える前に死んじまったから、謎のままだよ……。
……くそったれが……。
なぁ、もしーーー。
いや、まだ、これは言わなくていいや。
また、来るよ。
……高坂愛理先生……。

第二章：狩人篇：？：お前は気づかない≪※夜空視点≫

【小鷹、お前は今日も私の正体に気づかなかったな。
だが、私からお前に、正体を教える気は毛頭ない。
お前を部活に入れる事に成功してからすぐに、新しい部員が入ったな。
一人は乳牛。
一人は黒崎一護。
まぁ、正直、……“肉”は気に入らないが、黒崎は思っていたのと大分違っていた。
『無理矢理“肉”と許嫁になった』という噂は、どうやら本当のようだ。
次の部活内容はみんなでゲーム。これは、少し『リア充』に近づいたのかも知れない。
月曜日が楽しみだ。】

ーーー

「ふー」
日記を書き終わった私は、息を吐きながら、背筋を伸ばす。
ふふ、本当に月曜日が楽しみだ。
小鷹、お前は一日ランクをどれだけ上げる事ができる？私は今ランク3だ。おそらく、明日は二番目ぐらいのランクだろう。一位は多分黒崎だろう。あいつはランク5ぐらい余裕でいってそうだ。肉は知らん。
……。
……お前は、いつになったら“私に気づくんだ”？
小鷹、私はいつまでもーーー。

第二章：狩人篇：？：お前は気づかない≪※夜空視点≫（後書き）

次からはいつも通り、一〇〇〇文字弱に戻ります。

第二章：狩人篇：？：“オマエ”を狩る：３：

月曜日。
発足日不明の部活、『隣人部』の活動が始まってはいない。肝心の部長さんが居ないからだ。
今日は『モン狩』をするらしい。
部室には俺と星奈、そして羽瀬川がいる。三日月は日直で黒板の掃除をしていると、羽瀬川が言っていた。あいつ、日直の仕事はちゃんとやるんだな。何か以外……。
俺はウォークマンをいじる。何聴こうかな。

ガチャッ
バタン

「すまない。遅れた」
おい、お前タイミング悪いんだよ、と、心で思う。口には出さない。面倒臭い事になるなが眼に見えるからな。
「さて、さっそく始めるか。操作とかは予習してあるな？」
「あぁ」
と、羽瀬川が頷く。
「ふん、忙しかったけど仕方ないからちょっとだけ試しに遊んであげたわ。流流行ってるだけあって、割とよくできてるわね。まぁ所詮はゲームボーイ何でお子様のお遊びだけどね」
おぉ、何でこんなに自信満々なんだ？星奈の奴……。

……。
……まぁ、いいか。
「黒崎、お前はどうなんだ？」
「あぁ、ちゃんとやってきたよ」
「ならいい」
俺は自分のＰＳＰを起動させる。
「誰がホストになるの？」
星奈が言う。
正直誰でもいい。
「ランクが一番高い奴でいいだろ」
「そうだな。……小鷹と黒崎のランクは？」
「俺はまだ１」
「俺は５」
「ふっ、私は３だ」
三日月が自慢気に言う。おいおい、ここに最高位がいるぞ。
「あたーーー」
「肉には聞いてない」
「……、」
あ、やべ。この空気。また喧嘩する。
「馬鹿キツネ、あんたランク何だって？」
「？……３だ」
「そう、『３』なんだー。たった『３』でなにいきがってんの？頭おかしいんじゃないの？」
「……何がいいたいんだぁ肉ぅ？」
「あたしがあんたよりランク上ってことよ」
そう言って星奈は髪をかき上げながらＰＳＰの画面を俺達に見せる。
そこには、ランク５と書かれたハンターカードがあった。……しかも何でカードの色銀なんだよ。。俺よりカード良いじゃねぇか。お前変人に貰ったばっかだろ。何でそんなにランク高いんだよ。
『５！？』

三日月と羽瀬川が驚きの声をあげる。
「ちょっと見せてみろ」
そう言って俺は星奈のＰＳＰを取り上げる。
「あ、ちょっと！！」
「……、」
「……、」
「星奈」
「……、はい」
「お前金曜うちに帰ってからずっとこれやってたろ？」
「……、はい」
「ふーん。……“ちょっとだけ”、ねぇ……」
「し、獅子は“たかが”ゲームでも全力を注ぐのよ！！」
あ、開き直った。
「今度は“たかが”と来たか……」
「もうなんなのよ！！」
お、今度はキレた。
「なんだやる気か？」
「殺ってやるわよ馬鹿ギツネ！！」
また喧嘩かよ。もう俺は止めねぇぞ。面倒臭いしな。
「なー羽瀬川」
「なんだよ」
「俺らだけでやっとこうぜ」
「……そうだな」
「何かいきたいのあるか？」
「……この武器作りたいんだけど『これ』と『これ』が取れなくて」
「じゃぁこいつにするか」
「おう」

第二章：狩人篇：？：“オマエ”を狩る：４：≪※一部三人称≫

羽瀬川が作りたい武器の素材が取れるモンスターを二回狩った時だった。
三日月と星奈がいつの間にか喧嘩をやめて、俺達と一緒にモン狩をする事になった。
そして、三日月が羽瀬川のキャラを見た時、
「なんだその姿は」
三日月が意地悪そうに笑う。
まぁ俺も気づいてはいたが突っ込まなかった。下手に突っ込だら可愛そうだったからな。
「しょうがないだろ。まだ始めたばっかなんだから」
「装備じゃなくてキャラ自体の事だ。」
「……、」
「あぁ、それ俺も思った」
「……、」
羽瀬川のキャラは男で髪がプラチナブロンドのロン毛だった。まぁ、現実がこんなくすんだ金髪してんだから、しょうがないと言えばしょうがないが。
「ぷっ、あんたはこういうロン毛の外人になりたいわけ？」
「顔も美少年系か。悲しいくらい本人と似てないな」
……似てないか？羽瀬川顔はまぁまぁ良い方だと思ってたんだけど。
女子にはまだ不細工の部類に入るのかな。
「……黒崎。お前も人事ではないぞ？」

「あ？」
俺のキャラ。
ーーー軽くパーマがかかった黒髪。
ーーー少したれ目でブラウンの瞳。
ーーー名前【キヨタカ】
「いたって普通だが？」
「……まぁ十歩譲ってその容姿はいいとしよう。誰だキヨタカって」
「俺が好きなイラストレーターだが？」
「もういい」
いやいや、何でお前そんな落胆してんだよ。
この中じゃ一番俺がましだろ。明らかに。いや、圧倒的だな。
それに比べて星奈のキャラは容姿も体格もそのまま星奈じゃねぇか。
ちなみに名前は【星奈】。
三日月も右に同じ。
名前は【ＮＩＧＨＴ　】。
羽瀬川は【ホーク】。
うん。俺が一番ましだな。
……。
「で、何行く？」
「何でもいい」
「じゃこいつでいいか」
適当に決める。
そして、出発。

ーーー

≪三人称≫

森の中を、【キヨタカ】は駆けていた。
背中には身の丈程もある太刀。
【キヨタカ】は太刀を勢い良く抜き、目の前にいた鹿を狩る。
ズバッ！！という轟音が森に響き渡る。鹿を狩った【キヨタカ】は、素材を刈り取る。
その時だった。
【キヨタカ】の目の前に、巨竜が舞い降りてきて、ブレスを吐いた。
轟！！という轟音が、【キヨタカ】の耳に振動を与える。
ブレスを紙一重でかわした【キヨタカ】は、抜いていた太刀で、巨竜に斬りかかる。
だが、巨竜の屈強な鱗は、【キヨタカ】の渾身の一撃を弾き飛ばす。
どうやら切れ味が下がったようだ。
砥石で太刀の切れ味を戻すため、【キヨタカ】は一旦『第七エリア』を離脱する。
そういえば、【星奈】達はいつまで『第三エリア』でドランポスと戦っているのだろうか？【ホーク】はともかく、【星奈】や【ＮＩＧＨＴ】は上位のクエストでも互角に渡り合える筈だ。しかも相手は『モン狩』を始めたばかりの初心者が戦う雑魚中の雑魚。【星奈】達が苦戦するとは考えにくい。気になった【キヨタカ】は、一瞬だけ『第七エリア』に戻り、巨竜に『ペイントボール』を投げ、

マップに巨竜の居場所が刻まれる。それを確認した【キヨタカ】は、
『第三エリア』に向かう。
そこには、

【星奈】と【ＮＩＧＨＴ　】と己の武器で戦っていた。

ーーー

「お前ら何でゲームの中で喧嘩してんだよ」
俺が『第三エリア』に入って最初に見た映像は、【星奈】と【ＮＩＧＨＴ　】が己の武器で全身全霊を以て戦っている姿だった。
【ホーク】は何でか蟹型小型モンスターの大群にリンチされていた。
いやいや、何で羽瀬川は小型モンスターにリンチされてんだよ。倒せよ。それぐらい。
仕方ないから俺はドランポスを仕留める。
その時だった。
熱き戦いに【星奈】が勝利した瞬間だった。
【ＮＩＧＨＴ　】が死んだ事によって、俺達はベースキャンプに強制的に飛ばされた。
そして開始数秒も経たずに、
「あー、ボタン間違えたー」

ブスブスブスッ！！
三日月がわざとらしく、超棒読みで言葉を放っていく。
連続で【星奈】に矢が突き刺さる。
ある意味すげえな。三日月の奴。
今度は【星奈】が死んだ事によって、俺達は再びベースキャンプに飛ばされた。
……いや、俺はまだ一歩もベースキャンプから動いてないのだが。
そしてラスト一回になったクエストは、まだ俺達が協力すればクリア出来るのだが、そんな事こいつらが望む訳も無く、

『死ッねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ、ッ！！』

再び戦い始める。
はぁ、お前らの好きにしてくれ。
さて、あいつらのどっちかが死なないうちに巨竜狩るか。一応俺が金払ってるから、取り合えずそれだけでも取り戻したい。
俺のキャラーーー【キヨタカ】は一歩動く。
その時、
ズブシュッ！！
突如右から大量の矢が勢い良く飛んできた。
当然、そんな訳分からんうちに飛んできた矢などかわせる筈もなく、俺のキャラーーー【キヨタカ】は勢い良く左に飛んでいった。
「はぁ！？」
俺が驚いていると、三日月からありえない言葉を耳にする。
「あ！！邪魔だ黒崎！」
邪魔？
こいつ今邪魔って言ったか？
そうかそうかそういう事か。こいつら死にたいんだな？そうなんだ

な？
よし、そうと分かれば今すぐ殺してやる！！
【キヨタカ】ーーー俺のキャラは雷系最強の太刀ーーー『真撃雷神刀』を抜き取る。
そして……。
太刀だけが使える『鬼神斬り』を使うため、一時『第一エリア』に向かい、草食獣を切り殺す。。
『鬼神斬り』とは『鬼神ゲージ』をためる事で使える必殺業のようなものだ。『鬼神ゲージ』はモンスターを狩る事で少しずつたまっていく。
【キヨタカ】が放った『鬼神斬り』は、見事に【ＮＩＧＨＴ　】に四連斬りが全て直撃する。
ランク５のハンターが使う武器に、たかだかランク３のハンターの防具で耐えられる訳も無く、【ＮＩＧＨＴ　】は弱々しく力尽きた。
俺のＰＳＰの画面には『クエスト失敗』という文字が浮かび上がる。

ーーー

数日後。
羽瀬川が同級生を白昼堂々脅していた噂が、俺の耳に入った。
あいつ何したんだよ。

ーーー

隣人部活動報告その３
モン狩で殺し合い。
羽瀬川が同級生を脅す。

行間：二

「……いってぇ」
「大丈夫か？」
「あぁ、多分大丈夫だ」
「本当か。血出てるぞ？」
「気にするな」
「……お前こんな知り合いたか？」
「いや、上級生だこいつら。こんな容姿してると、色々面倒に捲き込まれるんだよ。つかお前も知ってるだろ？」
「……そうだったな」
「さて、そろそろ行こうぜ和人（かずと）」
「大樹（ひろき）はいいのか？」
「あぁ、忘れてた。……まぁ大丈夫だろう。あいつ喧嘩強いし」
「そうだな。いらない心配か」
「そうそう。あいつに限って怪我する事も無ぇだろ」
「……、」
「あ、ウォークマン壊れてやがる」
「残念だったな」
「あいつらこっちが武術使えねぇからって大勢で来やがって」
「俺が買ってやろうか？」
「遠慮しとく。お前に借り作ると後々面倒臭そうだ」
「……それは残念だ」
「ーーーおぉ！やっと見つけた！！」

「あ、戻ってきた」
「悪運強いな」
「いやー、まいったぜ。さっきお前の師匠がすげぇ怒って探してたぞ？」
「あ、そういや今日練習あったな」
「さっさと帰るか」
「そうだな」

第三章：過去篇―前―：？：世界は貴女の為に（前書き）

テスト終わったー。

第三章：過去篇―前―：？：世界は貴女の為に

俺と星奈と三日月が、ゲーム内で盛大に殺し合いをした二日後の事だ。
星奈はまた変人から『ゲーム』を貰ったらしい。“らしい”というのは、俺と星奈のクラスが違うため、あくまで俺がそういうのを見掛けただけなので、確かな情報では無いかも知れないからだ。まぁ、八割の確率で“あれ”は『ゲーム』だろう。
その為かどうかは分からないが、今日朝会った時のあいつの鞄がやけに大きかったのは覚えている。恐らく、『家庭用ゲーム機』で持ってきたのだと思う。
……。
今度は何の『ゲーム』する気なんだろうな……。
と、そんな下らない事を頭の片隅でぼんやりと考えながら、いつものようにのんびり部室に向かっていると、またあの女男に出会った。
……どこからどうみても女にしか見えねぇ。
別に声をかける必要性を感じなかったから、俺は女男に声をかかずに、そそまま通り過ぎ、部室へと向かった。

ーーー

部室に入ったとたん、いきなり目の前に拳が勢い良く放たれた。
俺はそれを紙一重でかわし、
「何だ三日月」
「何だじゃない。何故昨日は部活に来なかった？私は理由を聞いていないぞ？」
「教えてねぇしな」

ブチッ。

あ、やべ。キレたか？
「黒さーーー」

ガチャッ！！

星奈が部室に入ってきた事によって、三日月の言葉が中断される。
多分あっちに標的変わるだろうなぁ。
「肉ぅ、貴様いっぺん死ぬか？」
ほらな。
「何で部室に入ってすぐにそんな事言われなくちゃいけないのよ！」
いい加減慣れたな。こいつらの喧嘩にも。
因みに羽瀬川は呑気に小説読んでやがった。

ーーー

星奈と三日月がいつも通り喧嘩を終えてから、星奈は黒服野郎共を使って、結構なサイズのプラズマテレビを部室に飾り付けやがった。
それを見た羽瀬川は、
「何でテレビが？」
「ゲームをするためよ」
あっさりと星奈が答える。
「ゲーム、だと？」
あ、三日月が反応した。
「貴様、また殺しあいがしたいのか？」
「今回は違うわよ。……これよ」
そう言って、星奈は俺達にゲームソフトを差し出す。
俺はそれを見て、
「……、」
絶句。
……いやいや、違うだろ……。多分これ男がするゲームだろ……？
間違っても女がするようなゲームじゃねぇ……。
「……この『ときめいてメモリーデイズ』っていう訳分からん『ゲーム』をするのか？」
「？ええ」
「……悪い、急用が出来た。帰らせて貰う」
「断る」
「おい」
「一護はやりたくないの？」
「やりたくねぇ。羽瀬川もやりたくねぇって言ってる」

「え？」
「……やりたいのか？お前」
「……、やりーーー」
「はい、二対二で引き分け。俺帰る」
「あ、ちょっ、」
「……何なんだあいつ、」
「……ねぇ、バカギツネ」
「何だ」
「今日って何日？」
「？……六月六日だが？」
「そっか、近いんだね。一護」
「何が近いんだ？」
「お墓参り」

第三章：過去篇―前―：？：世界は貴女の為に：２：

三年前の六月九日。
この日、俺の師匠であり、“憧れ”だった高坂愛理が交通事故で死んだ。
原因は相手の飲酒運転。即死だった“らしい”。
まだ、一九歳だった。これからって時に、“あいつ”は死んだんだ……。
早すぎる『死』。
それを『理解』したくなかった。
だけど、俺は知る事になる。
『“あいつ”が俺に「八極拳」を教えた理由』をーーー。
『あの時、“あいつ”が「言おう」とした言葉』をーーー。
俺は、知る事になる。

ーーー

家に帰ると、早速俺は、墓参りに行く準備を始める、とは言っても、いつも持っていく物は決まっているから、すぐに終わった。

正直やる事が無い。
……。
寝るか……。
時刻はまだ三時二三分。寝れるな。
そう思いながら、俺は制服をハンガーにかけ、私服に着替え、布団に入り、睡魔に身を浸した。

第三章：過去篇―前―：？：世界は貴女の為に：２：（後書き）

次からは本当の過去。

第三章：過去篇―前―：？：世界は貴女の為に：３：

髪と眼の色が嫌いだった。
銀髪の髪に、碧緑の瞳。
日本人離れしたこの容姿でのせいで、俺はよく苛められていた。
誰も好き好んでこんな容姿に生まれた訳じゃないのに。
だから、周りの人は信じられない。
見掛けだけで判断する連中は嫌い。
世界は残酷だと思う。
俺みたいな容姿をしている奴は、この世に居るのだろうか？
ハーフならまだ良かったのかも知れない。ハーフならまだ言い訳が出来る。だけど、純粋な日本人で、この容姿はおかしい。
だがら、

『……死にたい』

何度も、死のうと思った。
苛められるのは嫌い。多分、誰もがそうだと思う。苛める奴は、決まって学年で一番強い奴とその子分共。
だからと言って、こっちから反撃しても返り討ちになるのが眼に見えてる。相手は体格が良かった。それにたいして、俺はモヤシみたいだった。体の線も細い。そして、色白。多分、周りの人は俺の事を、『氷』のようだと思っている。
別にそれでもいい。

もう、俺に干渉してこないなら……。

ーーー

朝は嫌い。
だって学校に行きたくないから。
だけど、

『いちごー！！朝だよ！！起きてー！！』

星奈はそれを許してくれない。

ガチャ
バタン

『もう、まだ寝てるの？早く朝ごはん食べて学校に行こうよ！！』
『行きたくない』
『……なんで？』
『行っても意味が無いから』
『意味あるよー？』
意味何てあるわけない。

もうたくさんだ。
『もういじめられたくない！！行ったってまた“あいつら”にいじめられるだけじゃん！！何でわざわざ“あいつら”にいじめられに学校に行かなきゃいけないんだよ！？』
『っ！？』
『っ！？……ごめん』
俺、何言ってんだろ。星奈は関係ないじゃん。これじゃあただの八つ当たりだ……。
『う、うぅん。あたしこそ、ごめんね？』
そう言って、星奈は部屋から出ていった。
最悪だな、俺って……。
でも、学校には行かない。
このままにーとになってもいい。
絶対に行きたくない。
先生も信じられない。

ーーー

『あら、星奈ちゃんどうしたの？』
『……いちご、学校に行かないって、』
『……、星奈ちゃん？』
『もう、「いじめられたくない」って言ってた』

『何だあの馬鹿まだそんなくだんない事言ってるのか』
『愛理、さん？』
『私が叩き起こしてくるわ。いっそこの鍛えに鍛えた八極拳を使ってもいい』
『それは、ちょっと……、』
『じゃ、言ってくるわー』

ーーー

『クオラァ！！一護！！いつまでちんたらしてんの！？さっさと起きて学校に行く！！』

ゴンッ！！

『いってぇ！？』
『やぁっと起きたか？』
こ、……このやろう……。拳法人に向かって使うってどういう事だよ。
『さぁ、行くよ！！』
『ち、ちょっと待て！！俺は行かないって言ってるだろ！！』
『うるさい！！あんたの意見なんかはなから聞く気ないのよこっちは！！』

『なんでだよ！！せめて訊けよ！！』
『うるさいって言ってるでしょう！！』
『くそ！！離せ！！俺は学校には行かないって言ってるだろ！！離っ、うぐ！？』
ドゴンッ！！
『よし、これで連れていきやすくなったな』

第三章：過去篇―前―：？：世界は貴女の為に：４：

廻転している。
世界は変わる。
廻転し、太陽と月が触れるたび、常にその姿を新たなものへと変えてゆく。
変わらないものがあるとすれば、それはきっと俺の無力。
廻転している。
運命が歯車だというのなら、俺達はその間で轢き砕かれる砂。
為す術は無い。
ただ、力が欲しい。
手を伸ばしても護れないなら、その先に握る刃が欲しい。
運命を砕く力はきっと、振り下ろされる、刃に似ている。

ーーー

“あの子”は繊細すぎる。

少し嫌な事があったら、すぐに傷つく。けど、コレだけは覚えていて欲しい。
私は、高坂愛理が、『“お前”に「八極拳」を教えた理由』をーーー。

ーーー

あの馬鹿を無理矢理学校に行かせてから約一時間が経った。
九時三七分。
私は、中学校で退屈な授業を受けついた。
教員は黒板に異国の文字ーーー英語をリズムよく書いている。

『Ｃｈｉｎａ』

チャイナ。
中国って意味だね。
まだ一年生で始まったばかりだから、比較的簡単な単語しか書かない。
簡単だねー。『“日本”の英語』は……。
“帰国子女”である私には、簡単すぎる。
暇だ。
……。

結論、寝る。
……一護、あんたは本当にいじめを受けてるのかな？もし本当だったら助けてあげようかな。でも子供同士のケンカだしね。“大人”である私がいじめっ子を叩き潰しても、一護の評判がますます悪くなるだけかな……？
おばさんにでも相談するか。でもあの人基本おっとりしてるからなー。ちゃんと話聞くか心配だなぁ。
『高坂？』
野太い声が聞こえた。
『うん？』
『「うん？」じゃない。お前ちゃんと授業を聞け』
『断る』
『……なぁにぃ？』
『だって簡単すぎるもん』
『……そういえばお前“帰国子女”だった。そうか、英語は御前の“得意科目”……か、』
『そういう事。じゃぁおやすみー』
『高坂、寝たら評価は「一」にするぞ？』
『なっ！？そんなの卑怯だ！！横暴だ！！職権乱用だ！！』
『職権乱用じゃない。俺はお前にちゃんも勉強中してもらいたいからこんな事を言っているんだ』
『英語はもう勉強しつくした』
『はぁ、……あぁ言えばこう言うな御前は』
このあと、私と教員の勝負は授業終了まで続いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6397y/

僕は友達が少ないif

2011年12月23日01時47分発行